

新たな始まり

Vol.42

親鸞聖人750回大遠忌

宗門長期振興計画の現状

「教学シンポジウム」について

本願寺教学伝道研究所では、宗門長期振興計画の重点項目⑤「時代に即応する教学の振興」にかかる企画の一つとして教学シンポジウムを開催しています。このシンポジウムは「現代にいきる親鸞聖人」をコンセプトに掲げ、二〇〇六（平成十八）年から二〇一一（平成二十三）年までの計六回、総合テーマを「親鸞聖人の世界」として開催しています。

1 今年のシンポジウム

◆シンポジウムのねらい

親鸞聖人がご往生なされて七百五十年が経とうとしている今、お念仏のみ教えは、日本にとどまらず、世界各地で多くの方々のよりどころとなっています。

現在、本願寺派の教団は、ハワイ開教区、北米開教区、カナダ開教区、南米開教区の四つの開教区と、台湾開教地、メ

キシコ開教地、オーストラリア開教地、ネパール開教地の四つの開教地、そして、ヨーロッパの各地に八つの浄土真宗協会が点在するヨーロッパ開教地区を海外に有し、それぞれの開教拠点で、お念仏のみ教えがよろこばれています。

しかし、日本では、言葉や民族をこえてお念仏が広がっている様子を知る機会には、なかなかありません。

そこで、本年度の教学シンポジウムでは、世界各地で活躍されている念仏者に

お話をうかがうことを通して、日本ではなかなか見えてこない、浄土真宗の魅力をあらためて探ります。

シンポジウムのタイトルは「Namo Amida Butsu～世界に響くお念仏～」です。海外の視座から浄土真宗を捉え直すことによって、お念仏の新たな一面を来場者の皆さまと一緒に見つけたいと思います。

◆プログラムについて

本シンポジウムは、二名の先生方に基調提言をいただく第一部と、海外の念仏者を紹介するインタビュー映像をもとに行うパネルディスカッションの二部構成です。

○第一部 徳永道雄師・原田マーヴィン師の基調提言

第一部の基調提言では、京都女子大学名誉教授の徳永道雄^{とくながみちお}本願寺派勤学から、浄土真宗の国際伝道についてご提言いただきます。徳永師は、真宗聖^{しんしゅう}教の英語

2011年度 教学シンポジウム

「Namo Amida Butsu～世界に響くお念仏～」

開催日時：2011（平成23）年12月22日（木） 13:00～16:30

開催場所：本願寺聞法会館 3階多目的ホール

第Ⅰ部 基調提言

提言者：徳永道雄（浄土真宗本願寺派勤学・京都女子大学名誉教授）
原田マーヴィン（北米・オレンジ郡仏教会開教使）

第Ⅱ部 世界の念仏者のインタビュー紹介とパネルディスカッション

パネリスト：徳永道雄（浄土真宗本願寺派勤学・京都女子大学名誉教授）
原田マーヴィン（北米・オレンジ郡仏教会開教使）
佐々木恵精（教学伝道研究センター所長）
〈コーディネーター〉
葛野洋明（教学伝道研究センター常任研究員）

パネル展示「Namo Amida Butsu～世界に響くお念仏～」

場所：本願寺聞法会館 1階ロビー

期間：2011（平成23）年12月中旬予定

翻訳事業の中心的な役割を長年にわたり担ってこられました。また、海外開教区の視察にも関わっておられます。

次に、ロサンゼルス近郊にあるオレンジ郡仏教会から、日系三世の原田マーズイン開教使をお招きし、開教現場の実情についてお話いただきます。メンバー数の減少が深刻な問題になっている北米開教区において、原田師が駐在するオレンジ郡仏教会は、伝道活動が成功している仏教会として大変注目されています。

○第二部 インタビュー映像を取り入れたパネルディスカッション

また第二部では、「浄土真宗との出会い」「浄土真宗の魅力」「これからの浄土真宗」という三テーマについて、それぞれにインタビュー映像の放映とパネルディスカッションを行います。

インタビュー映像は、今回のシンポジウムのために、世界各地の僧侶や門信徒の方々のご協力を得て新たに取材したものです。さまざまな国籍や年齢の方々の

映像と生の声を通して、海外においてお念仏が大切にされている様子や念仏者の熱い思いに触れることができます。その姿をみることは、親鸞聖人のお膝元である日本にいる私たちにとっても、大いに刺激的で学ぶことの多い機会になることでしょう。

このインタビュー映像をふまえて行うパネルディスカッションも必見です。ここでは、第一部から引き続き、基調提言のお二人にご登壇いただきます。また、パネリストとして、長年ヨーロッパの念仏者と交流を持ってきた、元京都女子大学教授の佐々木恵精ささき けいしょう教学伝道研究センター所長も加わります。なお、元北米開教区開教使で、龍谷大学教授の葛野洋明かのの ひろあき教学伝道研究センター常任研究員がコーディネーターをつとめます。

○パネル展の同時開催

本シンポジウムにあわせて、十二月中旬に、聞法会館のロビーにてパネル展示を行う予定です。海外寺院の活動の様子



北米開教区の子どもたち（パークレー仏教会）

2 世界に広がるお念仏

や、その広がりを地域ごとにまとめ、ご紹介いたしますので是非ご覧ください。

本シンポジウムにいつそう興味を持っていたために、本願寺派の海外開教について、簡単にご紹介いたします。

●日本人移民とともに海外伝道を支える四開教区

浄土真宗本願寺派における海外伝道は、百年以上の歴史を持ちます。海外伝道を歴史的に語る上で、その中心となるのは、ハワイ開教区（一八八九年創設）、北米開教区（一八九九年創設）、カナダ開教区（一九〇五年創設）、南米開教区（一九五〇年創設）の四開教区です。

アメリカ合衆国・カナダ、そしてブラジルを中心とする南米大陸には、明治期からの日本人移民とともに、日本人開教使によってお念仏のみ教えが伝えられました。

当時、他国へ移住するということは並大抵のことではありませんでした。夢を抱いて海を渡った日本人移民とさらにその子孫たちには、とても大きな苦難が待ち受けていたのです。特に、第二

次世界大戦中の強制収容や財産没収、そして不当な人種差別という試練は、言葉を絶するほどの凄まじいものでした。

そのような事情のなか、日本人移民や日系二世たちにとって、お念仏のみ教えと寺院の存在は、かけがえのない大きな人生の支えであり、よりどころだったのです。

時代の移り変わった現在の四開教区では、日本語を母国語としない二世から三世、四世へと世代が進み、開教使は現地

生まれの日系三世が中心となっています。そして、仏教会を構成するメンバーは、日系人に限らず多様な文化背景を持つ方々にも及んでいます。

寺院に集う人々の様子は、さまざまに変化していますが、親鸞聖人のお示しくださったお念仏のみ教えは、いまでも変わらず大切に受け継がれています。

親鸞聖人750回大遠忌 宗門長期振興計画

【基本的な考え方（コンセプト）】

- 『新たな始まり』
～明日の宗門の基盤作り～

【目標】

- 親鸞聖人750回大遠忌法要の修行
- 現代社会に答える教学・伝道態勢の構築とみ教えに生きる「人」の育成

【重点項目】

- ①法要の修行
- ②記念行事等の推進
- ③協賛行事
- ④伝道態勢の整備

⑤時代に即応する教学の振興

- ⑥新たな門徒の誕生（教線の拡充）
- ⑦国際伝道の推進
- ⑧寺院の活性化対策
- ⑨過疎・過密対策
- ⑩地域社会との交流
- ⑪現代社会への貢献
- ⑫人材育成の新規対策
- ⑬既存の人材育成施策の強化
- ⑭宗務機能の点検と拡充
- ⑮境内地等の整備

◆非日系人グループの誕生（ヨーロッパ開教地区）

一方、海外へ移住した日本人移民とその子孫によって設立された四開教区とは全く違った歴史を辿ってきた開教地や開教地区も存在します。それは、オーストラリア・メキシコ・台湾・ネパール、ヨーロッパで展開されてきました。新たにお念仏のみ教えに出遇った海外の方々が中心となって、開教事務所または寺院を創設していききました。

ここでは、具体的な事例として、ヨーロッパについて紹介します。

ヨーロッパでは、一九五四年にドイツ人のハリー・ピーパー師（一九〇七―一九七八）が、大谷光照前門主より帰敬式を受けてヨーロッパで初の浄土真宗信徒となり、二年後、ベルリンにて彼を中心とした「浄土真宗仏教協会」が創立されました。

また、そのピーパー師に次いでヨーロッパ浄土真宗の草分け的な存在であったのが、ベルギー人のアドリアン・ペル師



ヨーロッパの念仏者（ザルツブルグにおいて）

（一九二七―二〇〇九）です。彼はヨーロッパ初となる浄土真宗寺院「アントワープ・慈光寺」を一九七九年に開創しました。この寺院の寺号「慈光寺」は、大谷光真門主によって命名されました。

ヨーロッパ浄土真宗の歴史において、第一世代とも呼ばれるピーパー師とペル師の両人は、先の第二次世界大戦を経験し世間虚仮に目覚め、西洋文明に疑問を抱いて、平和的で寛容な仏教を求められ

ました。その求道の歴史は、「一つの地平線から別の地平線に向かってカーブした高速道路を歩いて来たようなものです」（『私の浄土真宗』稲垣久雄訳、永田文昌堂、一九九八年）とペル師が表現されているように、決して平坦な道ではなく、困難な歩みを経た末に、やっと辿り着かれたお念仏までの軌跡だったのです。

現在のヨーロッパ開教地区は、その第一世代から、次の第二世代へと法灯が継承され、ドイツ・ベルギー・スイス・オーストリア・英国・ポーランド・ルーマニア・ハンガリーに、浄土真宗協会やサングが設立されています。

浄土真宗のみ教えがヨーロッパにも徐々に広がりを見せはじめています。

3

宗門長期振興計画における

「教学シンポジウム」

教学シンポジウムは、二〇〇六（平成十八）年から、大遠忌法要が勤修されている二〇一一（平成二十三）年までの六

年間を通しての開催を予定してまいりました。本年度のシンポジウムは、全六回の最後にあたります。

教学シンポジウムでは、親鸞聖人が明らかにされた浄土真宗のみ教えが、現代に生きる私たちにとっていかなる意味を持つのかを明らかにすることを目的としています。

総合テーマ『親鸞聖人の世界』のもと、浄土真宗のみ教えをさまざまな角度からうかがおうと、各年のシンポジウムごとに、異なる次のようなテーマを設定してきました。

第一回 史実と伝承の聖人像



教学シンポジウム記録・親鸞聖人の世界 (第3回) 教学伝道研究センター

第二回 念仏の源流

第三回 浄土

第四回 真宗の土徳

地域に薫る念仏

第五回 現代における宗教の役割

葬儀の向こうにあるもの

第六回 Nano Amida Butsu

世界に響く念仏

また各回講演録も、随時刊行しております。

4 さいごに

「教学シンポジウム」は、現代に生きる私たちが親鸞聖人のお示しくださったお念仏のみ教えを、改めて味わわせていただく大切な機会です。特に、このたびは、世界の念仏者からの貴重な声を聞き、そこから新たな視点をいただく試みでもあります。

各開教区と日本では、念仏者を

取り巻く事情に異なる面があります。特に欧米では、日本と比べて、社会のさまざまな問題に対して具体的にどう取り組むのかといったことに対して、宗教者の積極的な発言が求められる場面が多くあります。社会から発言を求められているからこそ、より積極的に社会活動に参画していこうとする傾向を持っていると見ることもできるでしょう。

海外において日本と違った形で錬磨されてきた各開教区の在り方は、私たちのこれからの在り方を考えていく上でも、示唆に富むアイデアを内包していることでしょう。

きっと、新たな出遇いがあることと思います。皆さまのご来場を、心よりお待ちしております。

(教学伝道研究センター 釋氏真澄・禿定心)